『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室30周年記念論集—』 抜刷
大阪大学考古学研究室編
2018年3月発行

天皇陵古墳の名称

—仁徳陵古墳・大山古墳・大仙陵古墳・大仙古墳・仁徳天皇陵古墳をめぐって—

橋　本　達　也

ページ	誤	正
46　表下	白石 1986	白石 1984
48　13 行目	「大山古墳」提唱以後	「仁徳陵古墳」提唱以後
59　7 行目	表 4 備考覧	表 6 備考覧

天皇陵古墳の名称

—仁徳陵古墳・大山古墳・大仙陵古墳・大仙古墳・仁徳天皇陵古墳をめぐって—

橋　本　達　也

はじめに—最大の前方後円墳は何という名前なのか？—

この数年、天皇陵古墳について、「仁徳天皇陵古墳」のように、「○○天皇陵古墳」という名称をいろんな場面でみかけるようになった。最近ではさらに単純化した「古墳」をつけない「仁徳天皇陵」の語をNHKの古墳特集番組でさえも用いることがある[(1)]。

この天皇陵古墳を「○○天皇陵古墳」と呼称する動きは、百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録に関する活動の中で促進され始めたものである。具体的には、2010年10月に世界遺産暫定リストへの記載が決定して以降、その取り組みを推進する大阪府下の行政機関を中心に「○○天皇陵古墳」が用いられるようになった。2011年10月に大阪府立近つ飛鳥博物館で開催された特別展『百舌鳥・古市の陵墓古墳』はその名称の本格的な使用を象徴するものであった。その後、2014年には大阪府以外の古墳を専門的に扱った博物館の企画展でもその名称の使用がみられるようになった[(2)]。マスコミ等での使用頻度も増えてきている。

筆者はこれまで天皇陵古墳の名称問題は、森浩一の取り組みによって近代の政治的装置として設定された陵墓を、一般的な古墳と同様に研究対象とする考古学が獲得し得た学問の自由にかかわるものと理解していたので、近年の動向には違和感を覚えていた。この問題には他の研究者も声を上げ、2016年8月には学会合同のシンポジウムが開催され、2017年1月には論集も刊行されている（今尾・高木編2017）。そこでは、天皇陵古墳の名称、近世・近代から現状に至る陵墓のさまざまな問題について論じられている。

このような近年の状況を鑑みて、本稿ではあらためて天皇陵古墳の名称について検討してみたい。とくに古墳の代表として多くの総説・教科書で必ず記載され、一般への認知度も高く、天皇陵古墳の名称問題でもシンボルの役割を果たしてきた「仁徳陵古墳」・「大山古墳」などと呼称される彼の古墳について検討を加えることで、問題の一端を明らかにしたいと思う。

実際にこの古墳は森が提唱した「大山古墳」のほか、「仁徳陵古墳」・「大仙陵古墳」・「大仙古墳」など、研究者によってさまざまに呼称されている。教科書でも不統一で、名称問題を扱った2016年シンポの論集内でさえ「大山古墳」と「大仙古墳」が用いられている。なぜ、そのようなことになるのか。「大山古墳」は古墳名称として問題はないのか、これには以前から引っ

掛かるところがあった。以下に検討を進めたい。

1．研究者は何と呼んできたのか

（1）「仁徳天皇陵」、「仁徳陵古墳」から「大山古墳」へ

天皇陵古墳の名称について最初に問題提起を行い、また広く認知されるきっかけを作ったのは、周知のとおり森浩一である。氏は天皇陵古墳の被葬者への疑義に端を発し、それが確かなものとの印象を払拭し、通常の古墳として研究する立場から、仁徳天皇陵を「仁徳陵古墳」と

表１　古市・百舌鳥古墳群の

	陵墓名	森 1978	石部 1980	野上 1982	白石 1984	藤井寺市教委 1986	石部・宮川 1986	藤井・笠井 1987
15	仲哀	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ	－	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ
16	応神	誉田山	誉田山	誉田御廟山	誉田御廟山	誉田御廟山	誉田（御廟山）	誉田山
17	仁徳	大山	大山	「仁徳陵」	大仙陵	－	大山	大山
18	履中	百舌鳥陵山	石津丘	－	上石津ミサンザイ	－	石津丘	石津丘
19	反正	田出井山	田出井山	－	田出井山	－	田出井山	田出井山
20	允恭	市ノ山	市ノ山	市野山	市ノ山	市野山	国府市ノ山	市ノ山
22	雄略	高鷲丸山	高鷲丸山	－	－	島泉丸山	島泉丸山＋平塚	高鷲丸山＋平塚
23	清寧	白髪山	白髪山	－	白髪山	白髪山	西浦白髪山	白髪山
25	仁賢	ボケ山	ボケ山	ぼけ山	ボケ山	ボケ山	野中ボケ山	ボケ山
28	安閑	古市築山	高屋築山	－	高屋城山	高屋城山（高屋築山）	高屋築山	築山
	仲姫陵	仲ツ山	仲ツ山	仲津山	仲ツ山	仲津山	沢田仲ツ山	－
	白鳥陵	古市前山	軽里大塚	－	前の山	軽里大塚（前の山）	軽里前之山	－
	大塚陵墓参考地	河内大塚	河内大塚	－	－	河内大塚	河内大塚山	－
	藤井寺陵墓参考地	津堂城山	津堂城山	城山	津堂城山	津堂城山	津堂城山	－
	応神陵ほ号陪冢	－	－	墓山	墓山	墓山	墓山	－
	東百舌鳥陵墓参考地	土師ニサンザイ	ニサンザイ	ニサンザイ	土師ニサンザイ	－	百舌鳥ニサンザイ	－
	百舌鳥陵墓参考地	御廟山	御廟山	－	御廟山	－	御廟山	－

［註］
網掛けは森浩一の設定名称と共通するもの。枠アリは森の設定とは別に共通性を有する名称。
水野ほか 1994 では、天皇陵名の別称として古墳名を記載。
白石 1986、今尾 2011 は編年表内の記載。著者が対応させているわけではない。

［文献］
森　浩一　1978『大阪府史』大阪府
石部正志　1980『大阪の古墳』松籟社（森 1978 の表を改変引用）
野上丈助　1982『特別展　大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館
藤井寺市教育委員会　1986『古市古墳群―藤井寺の遺跡ガイドブック No.1―』

呼び換えるように提起した（森ほか 1970：pp.67-68）。1970 年のことである。その後、1976 年には天皇陵古墳も人物名をはずし、一般的な遺跡と同様に地名、在地での呼称に基づく名称を提唱する（森 1976：pp.140-141）。そして 1978 年の『大阪府史』（森 1978：pp.636-638）、1981 年の岩波新書『巨大古墳の世紀』（森 1981：pp.26-30）を通してその提起が広く知られるようになる。

天皇陵古墳の名称変更に関する提起は、単なる名称問題にとどまらず、古墳時代の象徴である巨大古墳を、通常の古墳と同じ俎上で研究対象とするための基盤となるものであった。この後に展開した近畿中央政権の構造にかかわる大型古墳群の系譜とその変動に関する研究におい

陵墓－古墳名称対照表

	陵墓名	堺市教委 1990	水野ほか 1994	和田 1998	白石編 2008	今尾 2011	頻度高い名称	その他の名称
15	仲哀	－	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ	岡ミサンザイ	－
16	応神	－	誉田山・誉田御廟山	誉田御廟山	誉田御廟山	誉田御廟山	誉田御廟山	誉田山
17	仁徳	大山	大山・大仙陵	大仙	大仙陵	大山	大山	大仙陵・大仙
18	履中	ミサンザイ	石津丘・ミサンザイ・百舌鳥陵山	百舌鳥陵山	上石津ミサンザイ	百舌鳥ミサンザイ	限定できず	百舌鳥陵山・石津丘・ミサンザイ・上石津ミサンザイ・百舌鳥ミサンザイ
19	反正	田出井山	田出井山・楯井	－	田出井山	田出井山	田出井山	－
20	允恭	－	市野山	－	市野山	市野山	市野山	市ノ山
22	雄略	－	高鷲丸山	－	島泉丸山	－	高鷲丸山	島泉丸山
23	清寧	－	白髪山	－	白髪山	白髪山	白髪山	－
25	仁賢	－	野中ボケ山		ボケ山	ボケ山	ボケ山	ぼけ山・野中ボケ山
28	安閑	－	高屋築山	高屋築山	高屋城山	築山	高屋築山	高屋城山・古市築山・築山
	仲姫陵	－	仲津山	仲津山	仲津山	仲津山	仲津山	仲ツ山
	白鳥陵	－	前の山・軽里大塚	－	前の山	軽里大塚	軽里大塚・前の山	古市前山
	大塚陵墓参考地	－	河内大塚山	河内大塚山	河内大塚	河内大塚	河内大塚	河内大塚山
	藤井寺陵墓参考地	－	－	津堂城山	津堂城山	津堂城山	津堂城山	－
	応神陵ほ号陪冢	－	－	－	墓山	墓山	墓山	－
	東百舌鳥陵墓参考地	ニサンザイ	ニサンザイ・土師	土師ニサンザイ	土師ニサンザイ	土師ニサンザイ	土師ニサンザイ	ニサンザイ
	百舌鳥陵墓参考地	御廟山	－	－	百舌鳥御廟山	百舌鳥御廟山	御廟山	百舌鳥御廟山

石部正志・宮川　徙　1986「「天皇陵」と考古学」『岩波講座日本考古学 7　現代と考古学』岩波書店
白石太一郎　1984「日本古墳文化論」『講座日本歴史 1　原始・古代 1』東京大学出版会
藤井利章・笠井敏光　1987「天皇陵辞典」『歴史読本　臨時増刊　特集天皇陵と宮都の謎』新人物往来社
堺市教育委員会　1990『堺の文化財―百舌鳥古墳群―』
水野正好ほか（天野末喜・笠井敏光・佐藤興治・辻葩学・中井正弘・福岡澄男・山本彰）　1994『「天皇陵」総覧』新人物往来社
和田晴吾　1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点 4　権力と国家と戦争』小学館
白石太一郎編（一瀬和夫・天野末喜・河内一浩・十河良和）　2008「古市・百舌鳥古墳群及び周辺の古墳群における既往の発掘調査」「古市・百舌鳥古墳群の主要古墳の概要」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』六一書房
今尾文昭　2011「近畿『講座日本の考古学 7　古墳時代（上）』青木書店

ても、1970年代に森が天皇陵古墳にかかわる障壁を取り払ったことの意義は大きい。古墳研究におけるひとつのエポックを画する提起であったといって過言ではない。筆者自身もその影響を受け、基本的なスタンスを支持する一人である。

森の問題提起の重要性は揺るがないが、一方でその名称には共通認識として支持されたものと、支持されなかったものがある（表1）。たとえば、天皇陵古墳に地域での呼称から通常の遺跡としての名称を与えるとしたものの、「大山古墳」の場合、当初は「大山」の根拠が十分説明されなかったし[(3)]、森自身が指摘するように（森1978：p.638）、いくつか呼称がある場合にどれを採用するかなど、古墳名称を決めるに当たっての基準が不明確であったことにもよるのであろう。森はあくまでも古墳から天皇陵名を外すための符合であると示しているが、一方でこの不明確性が研究者によって異なる名称を採ることや、あるいは天皇陵名を使用した方がわかりやすいという見解を維持させる余地を残すことにもつながったと考えられる。

（2）「大山古墳」提唱以後の名称について

次に1970年に行われた森浩一の「大山古墳」提唱以後についてみて行きたい。表2は古墳に関係する主要な総説、「大山古墳」に直接関わる論文、古市・百舌鳥古墳群に関わる図録、行政文書などからこの古墳の名称を抽出したものである。これをみると、森提唱以後、実際にもっとも多く用いられたのは「大山古墳」であり、それに（仁徳陵）のように括弧付きの天皇名を加えて表記する事例が多い。

これに対して、固有名詞に問題があることは前提としつつも、「仁徳陵」の名称を使った方が共通認識としては都合が良いという意見も存続し、「仁徳陵古墳」・「仁徳天皇陵古墳」の呼称や他の呼称を採るという立場もある。具体的には、岩崎卓也（岩崎1990：pp.200-201）、佐原真（佐原1990：pp.34-35）、一瀬和夫（一瀬2009：p.10）、菱田哲郎（菱田2007：p.29）らは、説明した上であえて「仁徳陵古墳」の採用を表明している。ほかにも、明確な説明は確認できないが、大阪府立近つ飛鳥博物館は開館以来、2011年まで「仁徳陵古墳」を採っていたし、都出比呂志は多くの機会で「伝仁徳陵古墳」を用いた。他に、白石太一郎は「大仙陵古墳」を採り、岸本直文は「大仙古墳」を採る。

2010年10月の世界文化遺産暫定リスト記載以降、「仁徳天皇陵古墳」の普及が推し進められているが、水野正好はもともと「仁徳天皇陵古墳」の名称にこだわると明言し（水野・白石1987：pp.30-31）、大塚初重氏・小林三郎もこの名称を用いていた（大塚・小林1982：pp.239-241）。最近では島根県立古代出雲歴史博物館が宮内庁の陵墓治定の名称を優先すると表明し、積極的に「仁徳天皇陵古墳」と表記する動きもある（仁木2014：pp.7-8）。

学術用語としては、「大山古墳」が多くの支持を得てきたことは確かである。ただし、実際には「大山古墳」に統一されなかったことはまず確認しておきたい。これは天皇陵古墳に対す

表２　仁徳陵古墳・仁徳天皇陵古墳・大山古墳・大仙陵古墳・大仙古墳（１）

西暦	和暦	書　誌　名	仁徳陵・仁徳天皇陵	仁徳天皇陵古墳	仁徳陵古墳	大山	大仙陵	大仙	その他・備考
2017	29	今尾文昭「天皇陵古墳をどのように呼ぶか」『世界遺産と天皇陵古墳を問う』思文閣出版				大山古墳（現、仁徳天皇陵）			
		岸本直文「古市・百舌鳥古墳群の王陵の被葬者」同上書						大仙古墳（現仁徳陵）	
		仁藤敦史「王統譜の成立と陵墓」同上書						大仙古墳（伝仁徳陵古墳）	
2016	28	森下章司『古墳の古代史』ちくま新書			仁徳陵古墳				
2015	27	大塚初重『古代天皇陵の謎を追う』新日本出版社	仁徳天皇陵（大仙古墳）、仁徳天皇陵、仁徳陵（大仙陵）仁徳陵				大仙陵（仁徳天皇陵）	大仙古墳（仁徳陵）	
		広瀬和雄「総論古墳時代中期の前方後円墳」『季刊考古学・別冊22』雄山閣				大山（仁徳陵）古墳			
2014	26	近つ飛鳥博物館『ヤマト王権と葛城氏』				大山古墳（仁徳天皇陵古墳）			
		堺市文化財課『堺の文化財　百舌鳥古墳群』				大山古墳（「仁徳天皇陵」）			
2013	25	橿考研附属博物館『５世紀のヤマト』				大山古墳			
		第４回百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議資料		仁徳天皇陵古墳					
2012	24	近つ飛鳥博物館『歴史発掘おおさか2012』		仁徳天皇陵古墳					
		十河良和「河内」『古墳時代の考古学』２同成社				大山古墳			
		石部正志『古墳は語る』かもがわ出版				大山古墳			
2011	23	**百舌鳥・古市古墳群世界遺産登録推進本部会議『世界遺産を大阪に　百舌鳥・古市古墳群』**		仁徳天皇陵古墳					５月：百舌鳥・古市古墳群世界遺産登録推進本部会議設置
		近つ飛鳥博物館『百舌鳥・古市の陵墓古墳』		仁徳天皇陵古墳（大山古墳／大仙陵古墳）					
		堺市『徹底分析・仁徳陵古墳』発表資料集			仁徳陵古墳				
		都出比呂志『古代国家はいつ成立したか』岩波書店					大仙陵古墳（伝仁徳陵）		
		土生田純之『古墳』				大山古墳（仁徳陵古墳）、大仙陵、大仙陵（現仁徳陵）			
		右島和夫・千賀久『列島の考古学古墳時代』河出書房新社				大山古墳（現・仁徳陵）、大山古墳			
		今尾文昭「近畿」『講座日本の考古学７古墳時代上』				大山古墳			
		松木武彦『古墳とは何か』角川選書				大山（伝仁徳陵）[古墳略]			
2010	22	**文化庁世界文化遺産特別委員会「百舌鳥・古市古墳群」暫定一覧表骨子（案）**		**仁徳天皇陵古墳**					10月：世界遺産暫定一覧表記載
		広瀬和雄『前方後円墳の世界』岩波新書				大山（仁徳陵）古墳			
		西川寿勝・田中晋作『倭王の軍団』新泉社				大山古墳（仁徳陵古墳）			
		堺市博物館『百舌鳥古墳群』			仁徳陵古墳				
		岸本直文「古墳の時代」『史跡で読む日本の歴史』２　吉川弘文館						大仙古墳	
		菱田哲郎「天皇陵と古墳研究」『歴史のなかの天皇陵』			仁徳陵古墳				
2009	21	近つ飛鳥博物館『古市・百舌鳥大古墳群展』			仁徳陵古墳				
		堺市博物館『仁徳陵古墳築造』			仁徳陵古墳				
		一瀬和夫『古墳時代のシンボル　仁徳陵古墳』新泉社			仁徳陵古墳				
2008	20	堺市文化財課『堺の文化財　百舌鳥古墳群』				大山古墳（「仁徳天皇陵」）			

表２　仁徳陵古墳・仁徳天皇陵古墳・大山古墳・大仙陵古墳・大仙古墳（２）

西暦	和暦	書　誌　名	仁徳陵・仁徳天皇陵	仁徳天皇陵古墳	仁徳陵古墳	大山	大仙陵	大仙	その他・備考
		白石太一郎「倭国王墓造営地移動の意味するもの」『近畿地方における大型古墳の基礎的研究』六一書房					大仙陵		
		十河良和「百舌鳥古墳群」同上書					大仙陵古墳		
		岸本直文「前方後円墳の二系列と王権構造」同上書						大仙	
		一瀬和夫「古市・百舌鳥古墳群における古墳の小型化」同上書					大仙陵古墳		
		加藤一郎「大山古墳の円筒埴輪」同上書				大山古墳、大山古墳（仁徳天皇陵）			
2007	19	**世界遺産暫定一覧表記載資産候補提案書　百舌鳥・古市古墳群―仁徳陵古墳をはじめとする巨大古墳群―**			仁徳陵古墳（大山古墳）				
		菱田哲郎『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会				大山古墳（仁徳陵古墳）			
2005	17	堺市博物館『百舌鳥古墳群と黒姫山古墳』			仁徳陵古墳				
2004	16	和田晴吾「古墳文化論」『日本史講座』第１巻　東京大学出版社				大山古墳			
2003	15	土生田純之「畿内の古墳」『日本全国古墳学入門				大山古墳（仁徳陵）			
		広瀬和雄『前方後円墳国家』角川選書				大山古墳、大山（仁徳陵）古墳			
2001	13	熊谷公男『日本歴史第03巻　大王から天皇へ』							大山陵古墳（現仁徳陵）
2000	12	寺沢薫『日本の歴史02　王権誕生』				大山古墳（現仁徳陵）			
		都出比呂志『王陵の考古学』岩波書店			伝仁徳陵古墳				
		堀田啓一「大山古墳の修築について」『琉球・東アジアの人と文化（下巻）』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会				大山古墳			
1999	11	白石太一郎『古墳とヤマト政権』文春新書					大仙陵古墳		
1998	10	白石太一郎（赤塚次郎ほか４名とのシンポジウム）『古墳時代の考古学』学生社					大仙陵古墳（現仁徳陵）		
		和田晴吾「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点４　権力と国家と戦争』小学館						大仙古墳	
		都出比呂志『NHK 人間大学　古代国家の胎動』日本放送出版協会			伝仁徳陵古墳				
		吉田晶『倭王権の時代』新日本新書				大山古墳			
1996	8	近つ飛鳥博物館『仁徳陵古墳―築造の時代』			仁徳陵古墳				
		高橋克壽『歴史発掘９　埴輪の世紀』講談社			仁徳陵古墳				
		堺市博物館『大王墓の時代』	仁徳陵						
		滝沢誠「大仙古墳前方部石室出土の甲冑について」『考古学雑渉』西野先生退官記念会						大仙古墳	
1994	6	水野正好「天皇陵の変遷」『「天皇陵」総覧』新人物往来社		仁徳天皇陵古墳					
1992	4	和田萃『大系日本の歴史２　古墳の時代』小学館				大山古墳			
		中井正弘『仁徳陵―この巨大な謎』創元社	「仁徳陵」						
1991	3	田中琢『倭人争乱』集英社					大仙陵古墳		
1990	2	堺市教委『堺の文化財―百舌鳥古墳群―』				大山古墳（仁徳天皇陵・大山陵古墳）			
		石野博信『古墳時代史』雄山閣				大山古墳（「仁徳陵」）			
		岩崎卓也『古墳の時代』教育社歴史新書			仁徳陵古墳				
		水野正好『日本文明史第２巻　文明の土壌　島国の原像』角川書店		仁徳天皇陵古墳					

表２　仁徳陵古墳・仁徳天皇陵古墳・大山古墳・大仙陵古墳・大仙古墳（３）

西暦	和暦	書　誌　名	仁徳陵・仁徳天皇陵	仁徳天皇陵古墳	仁徳陵古墳	大山	大仙陵	大仙	その他・備考
1989	元	大塚初重・小林三郎編（高島徹）『日本古墳大辞典』東京堂出版		仁徳天皇陵古墳		大山古墳			
		白石太一郎「巨大古墳の造営」『古代を考える　古墳』吉川弘文館					大仙陵古墳（現仁徳陵）、大仙陵古墳		
		都出比呂志「古墳時代の中央と地方」『古代史復元６　古墳時代の王と民衆』講談社						大仙古墳	
1988	63	佐原真「ピラミッド・始皇帝陵と仁徳陵古墳」『堺市制100周年記念事業世界巨大古墳国際会議』			仁徳陵古墳				
		水野正好「なぜ、河内に「天皇陵」が集まるのか」『再検討「河内王朝」論』六興出版	仁徳天皇陵、仁徳天皇陵（大山古墳・大仙陵古墳）						
1986	61	石部正志・宮川徙「「天皇陵」と考古学」『岩波講座日本考古学７　現代と考古学』岩波書店				大山古墳			
1985	60	水野正好「古墳時代」『図説発掘が語る日本史４　近畿編』新人物往来社		仁徳天皇陵古墳					
1984	59	白石太一郎「日本古墳文化論」『講座日本歴史』１　東京大学出版会					大仙陵古墳		
1983	58	近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店				大山古墳（伝仁徳陵）			
		末永雅雄『考古学調査に末永作戦』なにわ塾叢書　ブレーンセンター	仁徳天皇陵						
1982	57	大塚初重・小林三郎編『古墳辞典』東京堂出版		仁徳天皇陵古墳					
1981	56	森浩一『巨大古墳の世紀』岩波新書				大山古墳			
		中井正弘『伝仁徳陵と百舌鳥古墳群』			伝仁徳陵古墳				
		原島礼二・石部正志・今井堯・川口勝康『巨大古墳と倭の五王』青木書店				大山古墳			
		森浩一『古墳』保育社（第２版）				大山古墳、大山（仁徳陵）古墳			
1980	55	石部正志『大阪の古墳』松籟社				大山古墳			
1979	54	上田広範『前方後円墳』学生社（第２版）	仁徳陵						
		都出比呂志『世界考古学事典　上』平凡社	仁徳陵						
1978	53	森浩一「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』第１巻				**大山古墳、大山古墳—仁徳陵古墳**			
1976	51	中井正弘「伝仁徳陵古墳の周濠について」『考古学雑誌 61-4			伝仁徳陵古墳				
		森浩一『考古学入門』保育社				**大山古墳**			
1975	50	末永雅雄『古墳の航空大観』学生社	仁徳天皇陵						
		小野山節『古代史発掘６　古墳と国家の成立ち』講談社	仁徳陵						
1972	47	森浩一（上田正昭他３名との座談会）『壁画古墳の謎』講談社			仁徳陵古墳				
1970	45	末永雅雄「古墳文化総説」『新版考古学講座５　原史文化（下）古墳文化』雄山閣	仁徳陵						
		森浩一（甘粕健ほか４名とのシンポジウム）『シンポジウム古墳時代の考古学』学生社			**仁徳陵古墳**				

結合している欄は、欄の上・左側に対応の内容。
名称にかかわる画期となる箇所、事項をゴシックとした。

るそれぞれの研究者の立場、主張を反映するものでもある。そして、それは「大山古墳」の名称が誰もが無条件で賛同できるものでなかったということでもある。

2．教科書は何と呼んできたか

考古学を扱った書籍等では、「大山古墳」が主流ではあるものの、いくつかの呼び方が併存していきた。しかし、これまでには、｀一般｀に共通認識として「仁徳陵」の方がわかりやすいといった意見や陵墓名にこだわるという研究者もいた。｀一般｀は果たして「仁徳陵」がわかりやすいのか。それを考える上で教科書ではどのように表記されてきたのか確認したい。

まずは高校日本史の教科書からみよう（表３・４）。1976年までの教科書ではすべて「仁徳天皇陵」であった。その様相に変化が起きるは1977年からである。「仁徳天皇陵と伝えられる古墳」・「仁徳陵古墳」が登場し、仁徳天皇の陵であることを保留する表記があらわれる。1985年までには「仁徳天皇陵」という表記は採用されなくなっている。1982年には「大山古墳」の名称も教科書に登場する。1980年代には、「仁徳陵古墳」に括弧付きで（大山古墳）の表記、あるいは「仁徳天皇陵と伝えられる古墳」が主流で、1989年に「大山古墳（現仁徳陵古墳）」が登場してからは、「大山古墳」をメインとする表記が拡がりはじめ、さらに1994年以降は、「大山古墳」・「大仙陵古墳」に括弧付きの（仁徳陵）の表記が多くなり、さらにその後「大仙古墳」がやや増加傾向にある。現行高校日本史教科書では「大仙陵古墳」が最も多く、「大仙古墳」がそれに次ぐ。すなわち、かつての｀一般｀と現在の｀一般｀の認識は異なり、1990年代半ば以降の高校で日本史教育を受けた人には、「大仙陵古墳」か「大仙古墳」が第一に記憶されるべき名称となっている。

中学歴史教科書を確認しよう（表5）。中学歴史では、1977・78年に「仁徳天皇陵古墳」「仁徳天皇陵として知られている古墳」との表記が現れる。その後、1983年に「仁徳陵古墳」、1987年に「大仙古墳」、1990年に「大山古墳」が登場する。「仁徳陵古墳」を主とする表記は1990年代前半までで、以降は基本的に括弧付きの（仁徳陵）の表記となる。1990年代後半以降は「大仙古墳」がもっとも多く、「大山古墳」、「大仙陵古墳」が加わる状況である。現状の中学でも、基本的には「仁徳陵」の名称が記憶される第一のものではない。

かつて｀一般｀に広く普及していることをもって「仁徳陵」の名称使用が主張されたが、それは現在では根拠にならない。むしろ歴史教育ではこの20年ほど、陵墓名称の使用よりも、古墳名称を尊重してきているのである。

ただ、たとえば高校では「大仙陵古墳」が多いものの、中学では「大仙古墳」が多かったり、あるいは「大山古墳」を用いたりと表記は不統一である。執筆者側の事情は教育を受ける側には関係のないことであり、同じ対象を指して教科書ごとに表記が異なる状況が好ましいはずが

ない。むしろ教育上の用語は、学術的な検討を経て本来は統一されていてしかるべきであろう。このような不安定性の間隙を突く形で、近年、一部の教科書では「仁徳天皇陵」が用いられている。ことの重大性を考えれば、やはり本来の地名や旧来の呼称に基づくという一定の基準に沿った研究者間の合意形成が図られるべきであると思う。

3．本来の名称は何であったか

「大山古墳」について　「大山古墳」の名称についてあらためて考えておきたい。森は一般的な古墳名称と同様に天皇陵古墳も地名・地域での呼称から名称を採ることを提唱したが、にもかかわらず、「大山古墳」は、末永雅雄の批判があるように（末永 1983:pp.78-83）、歴史的にも、地名にも存在したことのない森が新しく創った名称であるのは間違いない。なぜ、「大山」なのか。これに関しては森自身、提唱時にはあまり明確な説明をしなかった。後に、「大山」か「大仙」か「そんなのはどうでもいい」、大正時代の『和泉の伝説』という書籍に、もともと「山」だったものを神秘性を付加するために「仙」の字を採用したとあるので、神秘性を避けた「大きな山」という意味の名称を採用したなどと述べる（森 2000：pp.15-16）。あるいは、天皇陵古墳の名称をつける際には、できるだけ近代の名称を避け、近世の土地での名称を参考にした、「大山」は近世での使用例があり、それに従ったとも述べている（森 2011：p.53）。

「大山」か「大仙」か　筆者は天皇陵古墳の名称が「大山」でも「大仙」でも良いとは考えないので、以下に確認しておきたい。

森の後年の説明では、「大山」は地名、地域でのより古い名称から採った名称であるように読めるのだが、実際にはそうではない。表6に近世～明治時代のこの古墳の名称が記された地方文書、絵図、地誌を書き出した[(4)]。現状でさかのぼり得る17世紀代の史料にはいずれも「大仙陵」の記載がある。一見してわかるように近世文書では「大仙陵」の記録が多く、とくに古い時期にその傾向が強い。『前王廟陵記』（1696年）や『諸陵周垣成就記』（1698年）では、字名が「大仙陵」であると記され、在地の土地・水利関係文書や絵図では「大仙陵」とだけ記すものが多い。くわえて、この表に引用していないが在地の堺奉行所関係の公文書はすべて「大仙陵」と記載されていることが指摘されている（久世 2017：p.52）。

また「大仙陵」は単独の使用例があるが、近世の「大山陵」の記述はいずれも仁徳天皇陵の説明で使用されており、地方文書での記載ではない。元は「山」で「仙」に変化したという認識は「泉州志」（1700年）や「全堺詳志」（1757年）にみられるが、いずれも著者は近世学問を修めており、在地の一次記録とはいえない。すなわち、天皇陵考証に関する知識と関係なく本来の地元で用いられた呼称は「大仙陵」であり、「大山陵」は音通を基にした近世学問上の解釈が加わっているとみなすのが妥当である[(5)]。

表３　高校日本史教科書

	山川出版社　詳説日本史・日本史Ｂ	山川出版　要説日本史・新修日本史・標準日本史・精選日本史	山川出版社　新日本史・日本史・新編日本史	山川出版　日本の歴史
2014			大仙陵古墳（仁徳陵）・大津透	
2013	大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）・白石太一郎			
2008			改訂版：大仙陵古墳（現、仁徳陵）・大津透	
2007	改訂版：大仙陵古墳（現、仁徳天皇陵）・白石太一郎			
2004			大仙陵古墳（現、仁徳陵）・大津透	
2003	大仙陵古墳（現、仁徳天皇陵）・白石太一郎			
1999			改訂版：大仙陵古墳（現、仁徳天皇陵）・早乙女雅博	
1998	改訂版：大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）・白石太一郎	大仙陵古墳、大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）		大仙古墳（伝仁徳天皇陵）・仁徳陵・平野邦雄？
1995			大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）・早乙女雅博	
1994	大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）・白石太一郎			仁徳天皇陵と伝えられている５世紀の前方後円墳、大仙古墳（伝仁徳天皇陵）、仁徳陵・平野邦雄？
1993				
1992	仁徳陵古墳（大山古墳）	要説・三訂版：仁徳陵（大山）古墳・井上光貞		
1991	新詳説・改訂版:仁徳陵古墳(大山古墳）・井上光貞：詳説再訂版・仁徳陵古墳（大山古墳）・井上光貞	標準：仁徳陵古墳（大山古墳）・井上光貞		
1990				新：仁徳陵と伝えられている５世紀の前方後円墳、大山古墳（仁徳陵古墳）・平野邦雄？
1989				
1988	新詳説:仁徳陵古墳（大山古墳）	要説・再訂版・仁徳陵（大山）古墳・井上光貞		
1987		仁徳陵古墳（大山古墳）		
1985	改訂版:仁徳陵古墳（大山古墳）・井上光貞	標準：仁徳陵古墳（大山古墳）・井上光貞	日本史・仁徳陵古墳・仁徳天皇の陵と伝えられる古墳・仁徳陵古墳（大山古墳）・井上光貞	改訂版:仁徳陵古墳（大山古墳）・平野邦雄？
1983	新版：仁徳陵古墳（大山古墳）・井上光貞	要説・新版：仁徳陵古墳・井上光貞		新版：仁徳陵と伝えられている５世紀の前方後円墳、仁徳陵古墳（大山古墳）・平野邦雄？
1982			新版：仁徳陵古墳、仁徳陵と伝えられる古墳、仁徳陵古墳（大山古墳）・井上光貞	
1981	再訂版：仁徳陵と伝えられる古墳、仁徳陵古墳・井上光貞	要説・改訂版：仁徳陵古墳・井上光貞：標準・再訂版・仁徳陵と伝えられる古墳、仁徳陵古墳・井上光貞		
1980		要説・再訂版：仁徳陵古墳・井上光貞		
1979				
1978		標準・改訂版：仁徳陵と伝えられる古墳、仁徳陵古墳・井上光貞		
1977	新版：仁徳陵と伝えられる古墳、仁徳陵古墳・井上光貞	要説・改訂版：仁徳陵古墳・井上光貞：要説・新版・仁徳陵古墳・井上光貞：標準・仁徳陵と伝えられる古墳、仁徳陵古墳・井上光貞		
1976				
1975	再訂版：仁徳天皇陵・井上光貞	要説・改訂版：仁徳天皇陵・井上光貞		
1974		要説・再訂版：仁徳天皇陵・井上光貞	改訂版：仁徳天皇陵・井上光貞	
1973		精選・改訂版：応神・仁徳・履中の諸陵、仁徳天皇陵・井上光貞		

にみる名称の変遷（1）

	山川出版社　高校日本史	三省堂　詳解日本史B・詳解日本史	三省堂　新日本史B・日本史	第一学習社　日本史B・	第一学習社　高等学校精選日本史B
2014	大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）・早乙女雅博				
2013					
2008	改訂版：大仙陵古墳（伝仁徳天皇陵）・早乙女雅博		改訂版：大仙古墳（伝仁徳陵）・十菱駿武		
2007					
2004	大仙陵古墳（伝仁徳天皇陵）・早乙女雅博	大仙古墳（伝仁徳陵）、大仙古墳	大仙古墳（伝仁徳陵）・十菱駿武		
2003					
1999	改訂版：大仙陵古墳（現、仁徳天皇陵）・白石太一郎	改訂版：大山古墳（伝仁徳陵）・十菱駿武			大仙陵（伝仁徳陵）古墳・岩崎卓也
1998					
1995	大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）・白石太一郎	大山古墳（伝仁徳陵）・十菱駿武	大山（伝仁徳陵）古墳・田中義昭	仁徳陵（大山）古墳・岩崎卓也	大山古墳・岩崎卓也
1994				三省堂　日本史	
1993		改訂版：大山古墳（仁徳陵と伝えられる）・十菱駿武		四訂版：大山古墳（仁徳陵古墳）、仁徳陵古墳・甘粕健	
1992					三省堂　高校日本史
1991			四訂版：「仁徳陵」とよばれる前方後円墳、「仁徳陵」とよばれる古墳・田中義昭		四訂版：仁徳天皇陵と伝えられる古墳・門脇禎二
1990		大山古墳（仁徳陵と伝えられる）・十菱駿武			
1989				三訂版：仁徳陵古墳（大山古墳）、仁徳陵古墳・甘粕健	
1988			三訂版:「仁徳陵」とよばれる前方後円墳、「仁徳陵」とよばれる古墳・田中義昭		三訂版：仁徳天皇陵と伝えられる古墳・門脇禎二
1987					
1985			改訂版：「仁徳陵」とよばれる前方後円墳、「仁徳陵」とよばれる古墳・田中義昭	改訂版：仁徳陵古墳（大山古墳）、仁徳陵古墳・甘粕健	改訂版：仁徳天皇陵と伝えられる古墳・門脇禎二
1983			「仁徳陵」とよばれる前方後円墳、「仁徳陵」とよばれる古墳・田中義昭	仁徳陵古墳（大山古墳）、仁徳陵古墳・甘粕健	仁徳天皇陵と伝えられる古墳・門脇禎二
1982					
1981			三訂版：仁徳天皇陵とされている古墳、仁徳天皇陵古墳・田中義昭	三訂版：仁徳陵古墳・甘粕健	
1980					
1979			改訂年不明：仁徳天皇陵古墳・家永三郎	改訂年不明：仁徳陵古墳・甘粕健	仁徳天皇陵と伝えられる古墳・門脇禎二
1978					
1977					
1976					
1975					
1974		仁徳天皇陵	仁徳天皇陵古墳・家永三郎・第4版1977参照	仁徳天皇陵・甘粕健・第4版1977参照	
1973					

結合している欄は左側欄に対応の内容。
人物名は執筆者欄の中から古代を担当したと考えられる研究者を抽出した。本文には記名がないので、筆者の認識である。

表４　高校日本史教科書

	実教出版　高校日本史B・高校日本史	実教出版　日本史B・日本史	東京書籍　新選日本史B	東京書籍　日本史B・日本史	清水書院　高等学校日本史B・高等学校日本史B
2014	大仙古墳（伝仁徳陵）、大仙古墳・橋本博文	大仙陵古墳（伝仁徳陵）・福永伸哉	大仙陵古墳（伝仁徳陵）、大仙陵古墳・？		最新版：大山古墳、大山古墳　仁徳陵と伝えられ・設楽博己
2013					
2008	新訂版：大仙古墳（伝仁徳陵）、大仙古墳・小宮恒雄	新訂版:大仙陵古墳（伝仁徳陵）・福永伸哉			改訂版：仁徳陵古墳（大山古墳）、大仙古墳・大橋信弥
2007					
2004	大仙古墳（伝仁徳陵）・小宮恒雄	大仙陵古墳（現仁徳陵）・福永伸哉	大山古墳（伝仁徳陵）、大山古墳・？	大山古墳（伝仁徳天陵）、大山古墳・永山修一	仁徳陵古墳（大山古墳）、大山古墳・大橋信弥
2003					
1999	大山古墳（伝仁徳陵）・吉田恵二		大山古墳（伝仁徳陵）・吉田孝	大山古墳、仁徳陵と伝えられており・吉田孝	
1998		大仙陵古墳（現仁徳陵）・都出比呂志			
1997					
1995	大山古墳（伝仁徳陵）・吉田恵二			大山古墳、仁徳陵と伝えられており、大山（仁徳陵）古墳・吉田孝	
1994		大山古墳（現仁徳陵）・都出比呂志	大山古墳（伝仁徳陵）・吉田孝		
1993				改訂：仁徳陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳陵古墳・吉田孝	仁徳天皇陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳天皇陵と伝えられる古墳・黛弘道、星野良作
1992					
1991					
1990	前・三訂:大山古墳（伝仁徳陵）、大山古墳・久保哲三			新訂：仁徳陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳陵古墳・吉田孝	三訂：仁徳天皇陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳天皇陵と伝えられる古墳・黛弘道・星野良作
1989		前・三訂：大山古墳（現仁徳陵）・都出比呂志			
1988					
1987	前・改訂：仁徳陵、仁徳陵古墳・久保哲三				仁徳天皇陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳天皇陵と伝えられる古墳・黛弘道・星野良作
1985		前・改訂：仁徳陵と伝えられる前方後円墳・都出比呂志		改訂：仁徳陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳陵古墳・吉田孝	
1984	仁徳陵・仁徳陵古墳・久保哲三				仁徳天皇陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳天皇陵と伝えられる古墳・黛弘道・星野良作
1983		仁徳陵と伝えられる前方後円墳・都出比呂志		仁徳陵と伝えられる巨大な古墳、仁徳陵古墳・吉田孝	
1982					
1981	帝国書院　高等日本史				
1978	最新版：仁徳天皇陵・笹山晴生			新訂：応神・仁徳両天皇の壮大な前方後円墳？	
1977		前・改訂：仁徳天皇の墓と伝えられる古墳・直木孝次郎		応神・仁徳両天皇の壮大な前方後円墳・？	
1976					
1975	最新版：仁徳天皇陵				
1974	三訂版：仁徳天皇陵・笹山晴生	仁徳天皇陵・直木孝次郎			
1973					
1971				新訂：応神・仁徳両天皇の前方後円墳・？	
1970		三訂：仁徳天皇陵・直木孝次郎			

にみる名称の変遷（2）

	清水書院　新日本歴史・詳解日本史B・要解日本の歴史	第一学習社　新日本史B・新日本史・日本史	自由書房　新日本史・新日本史・日本史	明成社　高等学校最新日本史	桐原書店　新日本史B
2014	最新版：大山古墳、大山古墳　仁徳陵と伝えられ・設楽博己				
2013				仁徳天皇陵（大仙陵古墳）・椙山林継	
2008					
2007					
2004					大仙陵古墳（仁徳陵古墳）
2003				仁徳天皇陵（大仙陵古墳）、仁徳天皇陵・椙山林継	
1999	詳解・改訂版：大山古墳（伝仁徳天皇陵）、大山古墳・大橋信彌				
1998	要解：大山古墳（伝仁徳天皇陵）、大山古墳・？	大山古墳（仁徳陵古墳）・？		自由書房　要説日本の歴史・精髄日本史・ワイド日本の歴史B	
1997			大山古墳（伝仁徳陵古墳）、大山（伝仁徳陵）古墳、伝仁徳陵古墳・江坂輝弥	W：大山古墳（伝仁徳陵古墳）、大山（伝仁徳陵）古墳・江坂輝弥	帝国書院　新考日本史B・新日本史
1995	詳解：大山古墳（仁徳天皇陵）、大山古墳・大橋信彌			W：大山古墳（伝仁徳陵古墳）、大山（伝仁徳陵）古墳・江坂輝弥	最新版：大山古墳（現在,仁徳天皇陵とされている）、大山古墳・和田萃
1994		大山古墳（仁徳陵古墳）・？	大山古墳（伝仁徳陵古墳）、大山（伝仁徳陵）古墳、伝仁徳陵古墳・江坂弥		
1993	要解・三訂：仁徳天皇陵と伝えられている巨大な前方後円墳、仁徳天皇陵と伝えられる大山古墳・前之園亮一、黛弘道			最新版：伝仁徳陵(大山)古墳、伝仁徳陵古墳・江坂輝弥	
1992		改訂：大山古墳（伝仁徳陵）・潮見浩			
1991			改訂：伝仁徳陵（大山）古墳、伝仁徳陵古墳・江坂輝弥		
1990	要解・新訂：仁徳天皇陵と伝えられている巨大な前方後円墳、仁徳天皇陵と伝えられる大山古墳・前之園亮一、黛弘道			新訂版：伝仁徳陵(大山)古墳、伝仁徳陵古墳・江坂輝弥	
1989		改訂：伝仁徳陵・潮見浩			
1988			新訂版：伝仁徳陵(大山）古墳、伝仁徳陵古墳・江坂輝弥		
1987	要解：仁徳天皇陵と伝えられている巨大な前方後円墳、仁徳天皇陵と伝えられる古墳・前之園亮一、黛弘道			改訂版：仁徳陵（大山）古墳、仁徳陵古墳・江坂輝弥	
1985		改訂：仁徳天皇陵・潮見浩	改訂版：仁徳陵と伝えられる前方後円墳、仁徳陵古墳・江坂輝弥		
1984				仁徳陵（大山）古墳・江坂輝弥	
1983		仁徳天皇陵・潮見浩	仁徳陵古墳・江坂輝弥		
1982	清水書院　日本史				
1981	最新版：仁徳天皇陵・上田正昭		新訂版：仁徳天皇の陵墓と伝えられる古墳、仁徳陵古墳・竹内理三？	精髄・新訂版：仁徳天皇陵・竹内理三	
1978	新訂：仁徳天皇陵・上田正昭		改訂版：仁徳天皇の陵墓と伝えられる古墳、仁徳天皇陵・竹内理三？	精髄・改訂版：仁徳天皇陵・竹内理三	以下：新日本史
1977			仁徳天皇の陵墓、仁徳天皇陵・竹内理三？	精髄：仁徳天皇陵・竹内理三	初訂版：仁徳天皇の陵、仁徳天皇陵
1976	三版：仁徳天皇陵・上田正昭				
1975					
1974				新訂版：仁徳天皇陵・竹内理三	最新版：仁徳天皇の陵、仁徳天皇陵
1973		日本史・改訂：仁徳天皇陵	新訂版：仁徳天皇の世界にも類のない巨大な規模をもつ陵墓、仁徳天皇陵・竹内理三？		初訂版：仁徳天皇陵
1971					
1970					

結合している欄は左側欄に対応の内容。
人物名は執筆者欄の中から古代を担当したと考えられる研究者を抽出した。本文には記名がないので、筆者の認識である。

表５　中学歴史教科書

	東京書籍	大阪書籍	日本書籍	帝国書院　中学生の歴史
2012	大仙古墳（仁徳陵古墳）			大仙（大山）古墳・仁藤敦史
2010				
2006	大仙古墳	大仙（仁徳陵）古墳		大山古墳
2002	大仙古墳	大仙古墳	大仙陵古墳（伝仁徳陵古墳）	記述無し
1997	大仙古墳、仁徳天皇の墓と伝えられています	大仙古墳	大仙陵古墳（仁徳陵古墳）	記述無し
1996				
1993	仁徳陵古墳		仁徳陵と伝えられる巨大な前方後円墳、仁徳陵古墳（大仙陵古墳）	仁徳天皇陵と伝えられる大山古墳
1992		大山古墳（伝仁徳陵）、大山古墳		
1990	仁徳陵古墳	大山（仁徳陵）古墳	仁徳陵と伝えられる巨大な前方後円墳、仁徳陵古墳	仁徳天皇陵と伝えられる古墳
1987	仁徳陵古墳	大仙（仁徳陵）古墳	仁徳陵と伝えられる巨大な前方後円墳、仁徳陵古墳	
1984	仁徳天皇の墓と伝えられる古墳、仁徳陵古墳		仁徳天皇陵古墳	
1983		仁徳陵古墳、応神陵古墳		
1981	仁徳天皇の陵（墓）と伝えられる古墳	仁徳陵古墳、応神陵古墳	仁徳天皇陵古墳	
1978	仁徳天皇の陵（墓）として知られているこの古墳	仁徳陵、応神陵とあり山古墳	仁徳天皇陵古墳	仁徳天皇陵
1977	仁徳天皇陵	仁徳天皇陵	仁徳天皇陵古墳	仁徳天皇陵
1974			仁徳天皇陵	仁徳天皇陵
1972	仁徳天皇陵（この年発行か不明確）	仁徳天皇陵		
1971				仁徳天皇陵
1970		仁徳天皇陵		
1957		前方後円墳（大仙陵）		仁徳天皇陵
1955	仁徳天皇陵、仁徳天皇の墓	仁徳天皇の陵（堺の大仙陵）、前方後円墳（大仙陵）	応神・仁徳天皇の古墳、仁徳天皇陵※	仁徳天皇陵
1951			仁徳天皇のみささぎ、近くの人が昔から大仙陵とよぶ、仁徳天皇陵	

堺に関するもっとも古い地誌『堺鑑』には「世人大仙陵ト云リ」との記載があり、一方で、明治36年『堺市名勝図』の「大仙陵と云ふ」、昭和５年『堺市史』第７巻でも俗に「大仙陵」と称すると記録される。また、1951年日本書籍発行の中学校歴史教科書には「仁徳天皇のみささぎ」、「近くの人が昔から大仙陵とよぶ」との記述があり（表５）、「大仙陵」の呼称が公・民にわたって根強く浸透していたことが読み取れる。

また、「仙」の用字が神秘性の付加のためというのも近世史料では由来を立証できず、後付けの説明とみなし得る。そもそも「仙」の文字に神聖性が内包されているとして、この文字だけを古墳名から意図的に外すのは適切なのだろうか。中･近世においては、例えば八幡、天神、権現、妙見あるいは稲荷などの方がよほど神秘的な存在であろう。他にも山の神、野神など、古墳が神秘的・神聖な土地と認識されて名付けられたものは多い。「仙」のみが神秘性をもつ文字として、本来のものであっても古墳名称に不適との理由は妥当ではないと考える。

久世仁士も森と同様に「大山陵と呼ばれてきたものが、皇室を敬い、神秘性を高める意味で

にみる名称の変遷

	清水書院　新中学校歴史 日本の歴史と世界	教育出版　中学社会歴史 未来をひらく	日本文教出版社 中学社会歴史的分野	育鵬社　中学社会 新しい日本の歴史	自由社 新しい歴史教科書
2012	大山古墳・仁徳天皇陵とされているもの	大山（大仙，伝仁徳陵）古墳・大山古墳	大仙（仁徳陵）古墳・泉拓良	大仙古墳（仁徳天皇陵）	仁徳天皇陵（大仙古墳）
2010				扶桑社 新しい歴史教科書	仁徳天皇陵（大仙古墳）
2006	大山古墳　仁徳天皇陵とされているもの	大山古墳（伝仁徳陵古墳）、大山（大仙）古墳		大仙古墳（仁徳天皇陵）	
2002	大山古墳　仁徳天皇陵とされているもの	大山古墳（仁徳陵古墳）		大仙古墳（仁徳天皇陵）、大仙古墳	
1997		大山古墳（仁徳陵古墳）、大山古墳			
1996	大山古墳　仁徳天皇陵とされているもの				
1993		大山古墳（仁徳陵古墳）			
1992	大山古墳　仁徳天皇陵とされているもの				
1990	大山古墳　仁徳天皇陵とされているもの	大山古墳（仁徳陵古墳）、大山古墳			
1987	仁徳天皇陵といわれるもの	大仙古墳（仁徳陵古墳）、大仙古墳			
1984	仁徳天皇陵	仁徳陵古墳			
1983					
1981	仁徳天皇陵といわれている古墳	仁徳陵古墳			
1978	仁徳天皇陵といわれている古墳	仁徳天皇陵			
1977	仁徳天皇陵	仁徳天皇陵			
1974					
1972					
1971	仁徳天皇陵	仁徳天皇陵			
1970					
1957	仁徳天皇の陵	仁徳天皇の陵			
1955	仁徳天皇の陵				
1951	仁徳天皇の陵				

仙の字を用いたのであろう」（久世 2017：pp.54-55）とするが、17 世紀より以前に「皇室を敬い、神秘性を高める」ことが広く在地社会内で浸透していたとは考えがたい。近世の絵図の多くや奉行所文書のすべてで「大仙陵」と記すこと指摘してなお（久世 2017：pp.50-52）、「大山」を採るのは、それこそ「余分な感情」を込めて解釈を加えたものではなかろうか。

「大仙」か「大仙陵」か　「大山古墳」を巡っては古墳に「陵」の文字を入れることについても、天皇陵として特別な存在という意識を生み出すために相応しくないとの考え方が示されている（森 1978：p.637、久世 2017：pp.57-58）。しかし再確認しておきたいのは、表 4 備考欄に示すように、この古墳は近世前半期から近代にいたるまで「大仙陵」・「大山陵」と「陵」まで含んで本来の名称だということである。近世の在地社会であまねく令制の陵墓の区別が認識されていたとは考えがたく、字義どおり大きく丘のような墓という意味で用いられているとみた方が良い。他にも例えば、ミサンザイ、ニサンザイを名称とする古墳と本質的な違いがあるのか疑問であるし、陵山古墳（奈良県・和歌山県）(6)、西陵古墳（大阪府）、三陵墓古墳群（奈良県）、

藤岡山東陵古墳（宮崎県）などの名称が否定されないこととも違いはないように思われる。

「大仙陵」の「陵」はいわば「塚」や「墓」と同様の使用法であり、本来の名称あってもこの古墳に限って「陵」を外すべきというのは、地域での呼称に基づくという古墳の命名法から外れ、現代の考古学者の感性で恣意的に改称していることになるのではないか。

「大仙古墳」について　また現在の地名、堺市堺区大仙町にもとづき「大仙古墳」の名称を採る立場もあるようである。ただその場合、この地名「大仙町」は昭和４年に名付けられた町名であることを確認する必要がある。本来ここは大正末期まで舳松村（和泉国大鳥郡、近代は泉北郡）で、「大仙町」は舳松村が堺市との合併後に創られている（小葉田編 1971：p.136）。現町名から「大仙古墳」と呼ぼうとするのは、昭和期に「大仙陵」の存在から創始された町名に基づいて、古墳名称を設定するという本末転倒の命名方法である。

小　　結　森浩一が「大山古墳」と名付けた古墳は記録の残る近世前半以来、在地での固有名詞は「大仙陵」である。そもそも、森自身が『古墳の発掘』で「江戸時代には一般に大仙陵とよんでいた」と記しているとおりであり、「「大仙」とは大山、つまり巨大な墳丘の意味である」（森 1965：p.39）というのは解釈である。解釈自体は妥当かも知れないが、「大山古墳」の名称は、天皇陵古墳をなるべく土地の呼称を用いて命名するという方針に適合するものとはいえない。

４．天皇陵古墳と名称―大仙陵古墳へ―

本稿では「○○天皇陵古墳」とういう名称への違和感に端を発し、あらためて古墳の象徴ともいうべき堺市所在の最大の前方後円墳はいかなる名称が相応しいのかを考えてきた。

森浩一は、大山古墳は「山」よりも「仙」が良いのではという意見に、「そんなのはどうでもいいんですよ」、「ひまな人は研究してもいいけど」、重要なのは「宮内庁がいうような名称をいつまでも使うのか、それとも変えるのかということです」と述べている（森 2000：pp.15-16）。たしかに、一古墳の名称の問題ではなく、多くの禁忌に包まれた天皇陵古墳研究の殻を強い抵抗に遭いながら打ち破るという大業の前には小異であったかも知れない。

しかし、暇人でというわけではないのだが、筆者にはこの問題がどうでも良いことに思えなかった。それは取りも直さず、天皇陵古墳の名称が使用者によって違いがあっても良いことになり、その極端な例として「仁徳天皇陵古墳」でさえも問題なしとすることに繋がるのではないかと思えるからである。

教科書の記述は、かつての「仁徳天皇陵」から「仁徳陵古墳」、「大仙陵古墳」・「大仙古墳」へと主流が移り変わってきたが、次には政策的に「仁徳天皇陵古墳」へと推し進められるのではないか危惧される。2011 年以降の状況をみれば、マスメディアや研究者の一部も追随する可能性が高い。その先には再び「仁徳天皇陵」さえ疑義なく、学術的な議論とは別に、古代か

表6　近世・近代の名称

西暦	和暦	資料名	名　称	備　考
1639	寛永16年	寛永泉州大絵図	大仙陵	
1684	貞享元年	堺鑑	仁徳天皇陵、大仙陵	「世人大仙陵ト云リ」
1684	貞享元年	湊村舳松村中筋村大仙陵水論出入済口覚書	大仙陵	
1689	元禄2年	堺大絵図	大仙陵	
1691	元禄4年	大仙陵新開之帳	大仙陵	
1696	元禄9年	前王廟陵記	百舌鳥耳原中陵、大山陵、大仙陵	「俗云大山陵」、「在舳之松村字大仙陵」刊行は1778（安永7）年
1698	元禄11年	諸陵周垣成就記	百舌鳥耳原中葬、大仙陵	「字大仙陵」、刊行は元禄12年
1700	元禄13年	泉州志	仁徳天皇陵、大山陵、大仙陵	「号大山陵」「今為大仙陵者訛也」
1704	宝永元年	堺市古図	大仙陵	明治34年写本で確認
1704	宝永2年	湊村絵図	大仙陵	
1704	宝永3年	大仙陵抜樋一件	大仙陵	
1710	宝永7年		大仙陵、仁徳天皇御廟	
1712	正徳2年	和漢三才図絵	大山陵、仁徳天皇の陵	
1728	享保13年	堺町絵図	大仙陵	
1730	享保15年	舳松領絵図上	大仙陵	「大仙陵池」
1732	享保17年	大仙陵地域間数巨細図	大仙陵	
1735	享保20年	堺大絵図改正綱目	大仙陵	
1735-36	享保20-21年	日本輿地通志畿内部（五畿内志）和泉志	百舌鳥耳原中陵、大山陵	「今號大山陵」、享保14-19年編纂
	享保年間	大仙陵絵図	大仙陵	
1757	宝暦7年	全堺詳志	仁徳帝陵、大仙陵、大山陵	「世ニ大仙陵ト称ス」
1759	宝暦9年	大仙陵由緒并間数絵図写	大仙陵	
1760	宝暦10年	大仙陵分水ニ付起請文	大仙陵	
1796	寛政7年	古事記伝	百舌鳥耳原中陵、大仙陵	「俗に大仙陵と云是なり」
1797	寛政8年	和泉名所図会	仁徳天皇陵、大山陵	「大山陵トモ云」「大仙陵と號して」
1798	寛政9年	河泉摂陵墓記　全	仁徳天皇百舌鳥耳原中陵、大山陵	「謂之大山陵」
1798	寛政10年	堺絵図	大仙陵	
1902	寛政12年以降	陵墓志	百舌鳥耳原中陵、仁徳天皇、大山陵	「字大山陵」
1805	文化2年	摂州泉州堺町之図	大仙陵、仁徳天皇御陵	
1808or 1822	文化 or 文政5年	山陵志	仁徳陵、中陵、大山陵	「土人仰之号日大山陵」
	文化年間	文化山陵図	仁徳帝	
1854	嘉永7年	聖蹟図志	中陵、大仙陵、仁徳帝	「大仙陵ト称」
1855	安政2年	山陵考略	仁徳陵、百舌鳥耳原中陵、大山陵	「字大山陵」
	幕末期	山陵図絵	仁徳天皇、仁徳帝ノ陵、大仙陵	「俗ニ大仙陵ト云」、文化山陵図影印本
1863	文久3年	文久改正堺大絵図（泉州堺絵図）	仁徳帝陵、大仙陵	「大仙陵ト云」
1863	文久3年	小笠原様大仙陵拝来海岸順路図	仁徳天皇陵、大仙陵	「俗言大仙陵」
1872	明治5年	柏木政矩「石棺並石郭ノ図」	仁徳天皇御陵	
1872	明治5年	同上写し「甲冑之図」	仁徳天皇大仙陵	
1872	明治5年	古川躬行『仁徳天皇大山陵前山崩壊記』	仁徳天皇大山陵	
1872	明治5年	堺大繪圖	仁徳帝陵、大仙陵	
1873	明治6年	仁徳天皇御陵絵図	仁徳天皇御陵	
1889	明治22年	落合直澄「仁徳御陵器物図解」『国光』1-4	仁徳御陵、仁徳天皇御陵	
1891	明治24年	堺市全図及商工業独案内	人王十七代仁徳天皇御陵	
1893	明治26年	黒川真頼「古代甲冑説」『国華』第48号	大山陵	
1894	明治27年	堺名所案内	仁徳天皇御陵、大仙陵	
1898	明治31年	小杉椙邨「上古の甲冑」『考古学会雑誌』2-4	大山陵、仁徳天皇百舌鳥耳原中陵	
1898	明治31年	若林勝邦「筑後国月岡発見の兜及び其他に就て」『考古学会雑誌』2-4	大山陵	
1900	明治33年	小杉椙邨「武器部類」『好古類纂』1-1	大山陵、仁徳天皇百舌鳥耳原中陵	
1901	明治34年	沼田頼輔「備中小田郡新山古蹟発見の鎧に就いて」『考古界』1-2	百舌鳥耳原陵	
1901	明治34年	堺名勝新地図	仁徳帝陵、大仙陵	
1901-02	明治34-35年	百舌鳥古墳群配置図	仁徳天皇御陵	
1903	明治36年	堺市名勝図	仁徳帝御陵、大仙陵	「大仙陵と云ふ」
1921・1922	大正10・11年	大道弘雄「大仙陵畔の大発見」『考古学雑誌』2-12・3-1	大仙陵（仁徳陵）、大仙陵、仁徳陵	
1926	大正15年	狭山池より大仙陵池迄用水路図	大仙陵	
1930	昭和5年	『堺市史』第7巻別編	百舌鳥耳原中陵、大仙陵、鷲の陵	「俗に大仙陵または鷲の陵とも称し」

アミ掛けは「大仙陵」、枠アリは「大山陵」の記述があるもの。

ら続く神聖な天皇を象徴するものとして広められることになりかねない。そのような動向に対して、天皇陵古墳も一古墳として研究する立場をとる上では、少なくとも大多数がその名称根拠に納得できるものが必要ではないだろうか。さまざまな経緯から一つの遺跡・古墳に複数の名称や号数がある場合はある。ただ、そのような場合でも現在の考古学研究や文化財行政上、名称の整合性をはかるのが一般的な対応であろう。天皇陵古墳も然りである。

本稿では「大山古墳」以外の、他の天皇陵古墳に言及する余力はなかった。ただ、表1をみると、「履中陵・百舌鳥陵山・石津丘・上石津ミサンザイ」古墳を除いては、名称に関するコンセンサスを得ることはさほど困難ではないように思う。今後も議論が必要であろう。

まず、本稿では古墳名称はその地名・地域での呼称を基準とするという原則に基づく以上、古墳の象徴たる最大の前方後円墳は「大山古墳」や「仁徳天皇陵古墳」ではなく、「大仙陵古墳」の名称が妥当であるという主張を結論としておきたい。

世界文化遺産の登録へ向けて、今後も宮内庁・文化庁そして大阪府や地元自治体間での調整を軸に古墳の価値付けが進められるであろうが、考古学、古墳研究の立場からはそれらとは別に、古墳そのものを分析する視角をもち続ける必要があることは揺るがない。その際の前提として、本稿が多少なりとも役に立つことがあるなら幸いである。

註

(1) 具体的には、2017年1月20日放送、『歴史秘話　ヒストリア』「コーフン！　古墳のミステリー」。

(2) 筆者が目にしたものでは、島根県立古代出雲歴史博物館企画展『倭の五王と出雲の豪族』、明治大学博物館企画展『ウイリアム・ガウランドと明治期の古墳研究』など。一方、大阪府立近つ飛鳥博物館は2014年特別展『ヤマト王権と葛城氏』で「大山古墳（仁徳天皇陵古墳）」、2015年『ワカタケル大王の時代』で「岡ミサンザイ古墳（仲哀天皇陵古墳）」など古墳名を第一に用いるようになっている。

(3) 当初は、「江戸時代の地図や記録から探した」（森1978：p.638）、「大山古墳の所在地は、堺市大仙町で、大仙古墳でもよいのだが、いくつかある表記のうち、あの巨大古墳には大山がふさわしい」（森1981：pp.28-30）程度しか説明がない。

(4) 白神典之氏に多くのご教示をいただいたほか、久世2017も参考にした。また現在、国立国会図書館や堺市立図書館の所蔵史料はWEB上で多くのものが閲覧可能である。

(5) なお、「仁徳陵古墳」の呼称を採る菱田哲郎は、一瀬和夫の意見に賛同し、仁徳陵という伝承の存在が重要だとの観点に立つ（菱田2009：p.29）。しかし、延喜式以降、17世紀後半までの間に仁徳陵に関わる伝承の存在を裏付ける史料はない。当該古墳を仁徳陵とするのも伝承ではなく、近世学問上で発見され、普及した知識とみなされる。

(6) 久世仁士は在地での呼称であっても「ミサンザイ・ニサンザイ」「陵山」は避けるべきとする（久世2017：pp.57-58）。この場合も一般的な古墳命名法から外れるのではないだろうか。

引用文献

一瀬和夫　2009『古墳時代のシンボル　仁徳陵古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」055　新泉社、東京:p.93

今尾文昭・高木博志（編）　2017『世界遺産と天皇陵古墳を問う』思文閣出版、京都：p.271

岩崎卓也　1990「巨大古墳の世紀」『古墳の時代』教育社歴史新書、東京：pp.199-238

大塚初重・小林三郎　1982「仁徳天皇陵古墳」『古墳辞典』東京堂出版、東京：pp.239-241

久世仁士　2017「百舌鳥三陵は如何に呼ばれてきたか」『世界遺産と天皇陵古墳を問う』思文閣出版、京都：pp.31-60

小葉田淳　1971「舳松・三宝村合併問題のくすぶり」『堺市史』続編第２巻　堺市役所、大阪：pp.132-138

佐原　真　1990「ピラミッド・始皇帝陵と仁徳陵古墳」『世界巨大古墳国際会議』堺市制100周年記念事業推進委員会、大阪21世紀協会、大阪

末永雅雄　1983「百舌鳥古墳群をみる」『考古学調査に末永作戦』ブレーンセンター、大阪：pp.67-92

仁木　聡　2014「付記　天皇陵古墳（大王墓）の表記について」『倭の五王と出雲の豪族』島根県立古代出雲歴史博物館、島根：pp.7-8

菱田哲郎　2007『古代日本　国家形成の考古学』京都大学出版会、京都

菱田哲郎　2010「天皇陵と古墳研究」『歴史のなかの天皇陵』思文閣出版、京都：pp.15-45

水野正好・白石太一郎　1987「対談　天皇陵を考える」『歴史読本　臨時増刊（第32巻第12号）　特集　天皇陵と宮都の謎』新人物往来社、東京：pp.30-46

森　浩一　1965「仁徳陵の発掘」『古墳の発掘』中公新書　中央公論出版、東京：pp.36-53

森　浩一　1976「須恵器窯址と阪南窯址群」『考古学入門』保育社、大阪：pp.137-141

森　浩一　1978「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』第１巻、大阪：pp.551-978

森　浩一　1981「仁徳陵から大山古墳へ」『巨大古墳の世紀』岩波新書、東京：pp.1-30

森　浩一　2000「仁徳陵から大山古墳へ―私の考古学人生と陵墓―」『日本の古墳と天皇陵』陵墓限定公開二〇回記念シンポジウム実行委員会（編）　同成社、東京；pp.3-32

森　浩一　2011『天皇陵古墳への招待』筑摩書房、東京；p.269

森　浩一・甘粕　健・大塚初重・小田富士雄・間壁忠彦・三上次男　1970「天皇陵の年代」『シンポジウム　古墳時代の考古学』学生社、東京；pp.61-107